

残念ながら木で作っていたため木が腐り、現在は、表示看板は**写真 3** の右写真のように取り除かれている。津波高さの想定は、シミュレーションの計算条件の与え方で大きく変わるが、過去に起こった事実は変わらない。一つの想定だけにとらわれなくて、歴史災害の情報に向き合うことが大切である。過去の痕跡碑など四国に住まわった先人の重要な伝承情報を、行政が公表しているシミュレーションの想定と合わせて表示する取り組みは、過去の情報を生かす具体的な防災対策の取り組みといえる。

以上のようなことから、鶯（はいたか）神社の津波痕跡石柱碑の平成 7 年の建立は、地域が過去の災害情報を考え活用した例として特筆できる防災風土資源である。

《得られる知恵・教訓》

過去の先人の伝承情報と、想定と合わせて表示する小学校の取り組みは、津波ハザードのポテンシャルを示し、想定だけにとらわれなくて、過去の災害情報を生かす重要性を教えている。

次に愛媛県の代表的な地震・津波に関する防災風土資源の事例を 2 つ選び、以下に述べる。

ウ) 愛媛県の代表的な地震・津波に関する防災風土資源の事例

① 愛南町の安政南海地震津波来襲記録（愛南町）（表 4 の番号 84）

安政南海地震の津波襲来記録では第 40 番札所がある愛南町御荘平城を貫流する僧都川（**写真 1**）愛南警察署前付近）まで津波が遡上したされている。また旧城辺町には安政南海地震津波で犠牲者が出たとされる深浦集落がある。さらに海岸沿いにこの集落より東に入り江の奥に向かうと家が流された満倉川の河口に岩木集落が、その少し上流に満倉集落がある。

愛南町で安政南海地震津波が最も大きかったとされている久良集落は、御荘平城から県道 297 号を南下し約 3km 行く地点にある。

安政南海地震は安政元年（嘉永 7 年）11 月 5 日（1854 年 12 月 24 日）に発生し、紀伊半島から九州地方にかけて震度 V 以上、震源に近い高知・徳島などでは震度 VI の揺れが推定されている[宇佐美（2003）]。この地震に伴う津波により、現在の愛媛県愛南町南端に位置する旧城辺町深浦（**写真 2**）では、死者が出ている。

この深浦の被害記録の元になった愛南町正木の蕨岡（わらびおか）家の「蕨岡家文書」の史料などから、弘瀬冬樹、中西一郎が論説「1854 年安政南海地震による愛媛県最南端（愛南町）での地震動・津波被害・地下水変化」（地震第 2 輯第 68 巻（2015））の中で、図 1 の地図を示し、嘉永 7 年（安政元年）（1854 年）に起きた大地震の記録（現代訳）から、愛南町海岸域の津波来襲位置と新田被害を次のように記述している。『海辺には津波が来た。外海浦の内、深浦、岩木、平城村貝塚、満倉の入り口のどこも流された家があった。新田のところは残らず海になり、大破した。和口川が僧都川と合流する所まで海水が来た』という描写がある。深浦、岩木、貝塚、満倉の入り口の位置を図 1 に示す。満倉の入り口（満倉口）の位置は厳密には特定できないが、旧一本松町の海岸線が 120m（すなわち満倉橋から 120m 内陸）であること[一本松町史編集委員会（1979）]を根拠として津波来襲位置を決めた。津波は和口川と僧都川の合流点（図 1 の赤丸）まで遡上した。津波は現在の河口から 1km 以上も浸入したことになる。新田は地震による地盤沈下または地震・津波による堤防の決壊、もしくはその両方の効果で海になったのであろう。なお 1960 年チリ津波は、御荘湾に浸入し、差引き 4m を越す潮位変化により湾一帯が被害を受けた。特に真珠養殖の被害が大きかった[御荘町史編集委員会（1970）]。この時も津波は僧都川を遡上した[愛南町役場（2013、私信）]。』

この記述で示された旧御荘町と旧城辺町、旧一本松町の津波来襲位置を図 1 に示す。

また旧城辺町の岩水の海拔 20m の津波避難場所からの岩水集落の様子を撮影したものを**写真 3**に示す。旧一本松町の満倉橋からの満倉集落の状況を**写真 4**に示す。

村上仁士ら（自然災害科学 J. JSNDS15-1、1996）の四国沿岸での歴史津波の津波高によれば、安政南海地震津波の愛南町の津波高は、岩木 3.5-4m、満倉 2-3m、深浦 3-4m、久良 4-5m、貝塚 2-3m と報告されている。**写真 5** に愛南町で最も津波高が高い久良の避難場所の久良小学校からの久良集落の状況を、**写真 6** に養殖筏が広がる久良湾の様子を示す。



写真 1 僧都川の津波遡上地点付近の様子



写真 2 旧城辺町の深浦集落の様子



図 1 愛南町の安政南海地震津波来襲位置図

(出展：弘瀬冬樹、中西一郎が論説「1854年安政南海地震による愛媛県最南端（愛南町）での地震動・津波被害・地下水変化」（地震第2輯第68巻（2015））



写真 3 避難場所からの岩木集落の様子



写真 4 満倉橋からの満倉集落の様子



写真5 久良小学校からの久良集落の様子



写真6 養殖筏が広がる久良湾の様子

《得られる知恵・教訓》

愛南町の海岸部は、入江や湾に富む海岸地形を呈しており、歴史地震津波で大きな被害を受けて来ている。今日、沿岸域の発展や養殖等、沿岸域の活用も活発化しており、津波の被害ポテンシャルが大きくなっていることを教えている。

② 宝永津波で被災伝承がある碓神社跡（西条市）（表4の番号88）

愛媛県では、四国の瀬戸内海沿岸中央部に位置する西条市に宝永津波で被災したとされる神社の記録がある。それは室川の河口近い玉津地区にある碓神社（写真1）である。

加藤正典氏の明神木の歴史と碓神社、伊予西条の歴史一考察 2001によると、現在の碓神社所蔵の棟札には「宝永四年(1707)十月四日大地震以後高汐満就中宝永五年八月三日大洪水高汐社中迄上揚砂尺余段々及大破今年新造営干時正徳二年(1712)九月八日御遷宮」と記されている。宝永地震を受けた翌年、この地は洪水と高潮に見舞われ、社地まで浸水し、打ち上げられた砂で30cmも埋まり大破したため、新たに造営したことが記されている。

「西条誌」稿本天保十三年(1842)の「明神木村」の項にも「宝永の高潮に破損し今の処に移る。」とある。西条市明神木の干拓でできた低地にあった碓神社は、宝永地震の地震動により地盤沈下し、その翌年の高潮で社殿が浸水したため、社殿が移されたか、あるいは、この宝永地震により地盤沈下した後、津波に襲われ、さらに翌年の高潮による水害がもとで社殿が潮に浸かったため、碓神社の社が遷されたのかは明確でない。その移転は図1に示すように2度移転し現在の場所にあることも分かっている。その宝永津波か翌年の高潮の被災を受けたとされる旧碓神社跡には、現在、小さな祠と石碑（写真2）が建立されている。

《得られる知恵・教訓》

宝永の高潮に破損し今の処に移る。被災伝承がある旧碓神社跡は、宝永地震津波であった可能性が高いことを教えている。



写真1 現在の碓神社(玉津地区)



図1 碓神社の移転変遷図



写真2 旧碓神社跡